

International Conference On Human Retrovirology: HTLVに参加して

病理学研究部

帯刀 誠

この度、幸いにも医科学研究所国際交流基金の助成を受けて、5月14日から19日にかけてアメリカ、ニュージャージー州で開催された6th International Conference On Human Retrovirology: HTLVに参加する機会を得ました。

このConferenceは、Human Retrovirusのなかでも特にHTLV (Human T-lymphotropic Virus) に関してその基礎的、臨床的研究についての国際的な情報交換を目的に、International Retrovirology Associationによって2年毎に世界各国で開催されてきました。前回(1992年5月)の熊本に次いで今回は6回目の開催で、私自身は熊本に次いで二度目の参加となりました。

周知の通り日本、とりわけ九州、沖縄はHTLV-1のendemic areaであり、HILVに関する基礎的、臨床的研究の分野では、当研究所の諸先生方をはじめ日本人研究者の業績は世界で高く評価されてきております。このためこの学会は国際会議のわりに日本人研究者の占める割合が高く、国内の諸学会で馴染みの顔ぶれのために同窓会的印象を持ちましたが、2年毎の国際会議とあって、その発表内容が新鮮で、また質疑応答は実に率直であると感じました。

学会の内容は疫学、ウイルス学、免疫



ヤング・フランチーニ博士夫妻宅にて

学、分子生物学、臨床・診断学、実験動物学のそれぞれのセッションに区分され、合計40のplenary sessionと約120のposter sessionから構成されており、今回は幸運(?)にも分子生物学のplenary sessionの場で発表させていただきました。

全体的にはHTLV-2についての疫学や病原性についての認識以外に、HTLVの病因に深く関わるいくつかの新しい知見を得ることができました。HTLVの分子病理学を研究テーマにしている私にとってこの点が最大の収穫と言えるでしょう。具体的な内容については紙面の都合上省略させていただきますが、興味をお持ちの方はAIDS research and human

retroviruses 1994;10:433-510を参照していただけると幸いです。

また、学会終了後はNIHのRobert C. Gallo博士の研究室を訪れ、夜はG. Franchini, N. S. Young博士夫妻、A. Gessain博士、Klotman博士夫妻らとお酒を交え、楽しいひとときを過ごしたのもよい収穫(?)となりました。(写真)

最後に、本基金の設立および運営に携わってこられました全ての方々に厚く御礼申し上げます。また、今後も引き続きこの基金の助成によって一人でも多くの若手研究者が、海外で開催される国際会議に出席し発表、討議できる機会が得られることを願って止みません。

編集後記

2号の新病院長あいさつに続き、今回研究部の紹介がスタートしました。第1回は細菌研究部です。医科研では伝染病研究所の設立以来この分野において、表紙にもあります赤痢菌の発見をはじめ多くの業績をあげてきました。吉川教授の言われる通り、感染症の脅威は決してなくなる事はありません。この様な感染症や癌、そしてこれらに対する生体防御機構についての伝統ある研究に加え、情報伝達、神経、ゲノム

解析など医科研の新しい研究活動を紹介していく予定であります。

創立記念日の第1号以来、多くのご批判や激励(これは少ない)を頂いて参りました。医科研NOWは内部の相互理解と外部への紹介という少々欲張った企画であります。皆様の建設的なご意見により内容の充実を図りたいと編集室一同考えております。ご協力どうぞ宜しくお願い致します。

④